

編集部の課題・展望

編集部 田中泉美 (国立姫路病院図書室)

1974年12月に創刊号が発行されて以来、当協議会の会報・会誌は、20年間、会と会員を結ぶパイプラインとしての役割を担ってきた。1992年には会報が通巻100号を数えることとなった。創刊当初は会員22機関に配られたが、現在、会員101機関をはじめとして、個人購読会員へ28部、機関購読会員へ18部、寄贈27部、そして他誌との交換として6部がそれぞれ配布されている。中断することなく刊行され、病院図書室を中心に広く親しまれる雑誌として成長したことは大変喜ばしい。

1992年より「図書館雑誌」の資料室欄に全号が Index され、1993年からは医学中央雑誌へ収載されることとなった。また、「科学技術文献速報」や JOIS、STN International のデータベースの収録対象誌にも新たに加わり、今後、より一層広範囲に読者を得るものと予想される。我々編集部は責任の重さをひしひしと感じ、身の引き締まる思いがする。そこで編集部で課せられた今後の課題・展望として主なものを次に述べることにする。

1. 発行形態について

1992年度より会報・会誌の発行形態を一新し、会誌「病院図書室」として一本化した。発行頻度は Quarterly (2, 5, 8, 11月) である。各号のページ数増加と平均化によって、まとまった記事の掲載が可能になるなど、従来に比べ企画・編集においてプラス面が多くなった。各号に表紙も付き、保管にも便利になったかと思われる。この発行形態は読者からも

好評を得ており、今後も続行する方針である。

2. 掲載記事の内容について

ここ数年、協議会の新入会員が急増した。そこで読者の層も厚くなり、ますます記事の多様化が要求されている。協議会活動の周知徹底はもちろんのこと、病院図書室専門誌として担当者の資質向上につながるものを提供しなければならない。タイムリーな特集記事をはじめ、各シリーズも定着してきた。誌面を通して担当者の声を届けるコーナーも設けている。また、担当者以外の方々に執筆をお願いし、広い視野に立った記事掲載をと心掛けていく。1号約40ページの中にさまざまな要素を盛り込むのは容易ではないが、読者サイドが求めるものを積極的に取り上げること、そして、一人でも多くの方に執筆参加していただくことがポイントと言えよう。

3. 編集体制の強化について

年に約3回の編集会議が行われる。今年度より新しく編集部責任者となった前田氏(西淀病院)をはじめ8名の体制となった。メンバーの編集経験年数は1年から17年と幅広く、和気あいあいとした雰囲気の中で、多彩な意見交換がなされる。企画に始まり、原稿依頼・整理、レイアウト、校正、発送と作業が続く。スタッフは多忙な日常業務をやりくりし、これらの作業に取り組む。スタッフの負担軽減や作業一連のスムーズな流れを考慮し、役

割分担等の編集体制の見直しはたびたび行っている。しかし、編集会議で必ずと言ってよいほど反省すべき点としてあげられることが、発行期日の遅れと誤植である。これらの慢性化を防ぐため、編集スケジュールを各プロセスごとに再検討する必要がある。

上記以外に広告収入の増加を計るなど財政面での諸問題もある。問題点はそのつど柔軟な姿勢で対処したい。機関紙としての役割を果たし、また読者の方々に愛読される雑誌となるよう、編集部一同、チームワークを最強の武器として今後も最善を尽くして行きたい。